



鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第115号

2022年1月7日

ウィズ・コロナ時代と万物共生みの生命文明

NPO法人社叢学会理事長・京都大学名誉教授
菌田 稔

ついに三年越しというべきか、おそらくは21世紀最大のパンデミック（世界的大流行）を呈して、世の中の仕組みを根底から揺さぶるとは、思いも寄らぬ新型コロナウイルスの跳梁となりました。

しかも、その依って来たところの原因が、世の識者の指摘によると他ならぬ現人類が近現代に築いてきた科学技術文明とそのグローバリゼーション（世界化）だということです。

たとえば問題の新型ウイルスにしても、元来は野生のコウモリに寄生する微生物で、大きさは1/10,000³ほど、電子顕微鏡でしか見えない。タンパク質の殻に遺伝子のヒモが入っているだけの単純な構造だが、他の生き物の細胞に入り込んで生存に必要なシステムを巧妙に乗っ取り、自分の分身を作り出して猛烈な勢いで増殖するというしたたかな寄生生物です。

ところが、ウイルス自体が地球上に誕生したのは約30億年前で人類をはるかに凌ぐ生命体。以来さまざまな自然の生き物に寄生して共存してきたが、人間がその自然に立ち入れば、直接か間接かに感染して疫病化するのです。しかも一旦人体に感染すれば、現代のグローバルな大都市文明が働くモノ・ヒト・カネ・情報の大量・迅速な移動によって世界のどこにでもあっという間に拡散することになります。

ウイルス学者の指摘によると、20世紀以来の電子顕微鏡による発見で人や動植物に潜むウイルスが現在は五千種類を超えているが、実は野生の哺乳類には少なくとも32万種類の未知のウイルスが潜んでいると推定されているとのこと。たとえ今回の新型コロナウイルスの世界的大流行が数年以内に終息するにしても、今後将来の世界は、いわば「ウィズ・コロナ時代」として次々に出現する新たなウイルスとの対決よりも共生の可能性を模索することになりましょう。

ところで過去の先人たちは、どのようにして流行病に対処してきたのでしょうか。

古来、疫病が蔓延した原因には一般に不祀の神霊や死霊の祟りによるものとされ、歴史時代には須佐之男命・牛頭天王や疱瘡神などの霊威神や無念の死を遂げた人物の怨霊（御霊）の仕業とも畏怖されて、いずれもその憤怒を鎮め和める神事や祭礼をもって疫癘を収めるしか、ほかに特段の手立てもなかったと思われまふ。要は、疫霊の跳梁を鎮める工夫であったのでしよう。

明治近代化に伴った西洋医学の普及が疫学の発想を広めて、天然痘やペスト、コレラ、結核、インフルエンザなどの感染症を疫霊の所業から解放し、病原菌からの防疫療法に取って代わって以来今日まで、いまでは至って手軽に菌類やウイルス類を薬殺してはばからないようになっていきました。

ですが、今回のようなコロナ禍のパンデミックが今後未来の人類文明をたびたび脅かすようになって、いつまでもこだわる人類至上の生命主義に、いつか微生物の立場から反旗をひるがえすことが果たしてあり得ないか。

要は、「目にみえぬ敵」とするコロナウイルスを徹底的に抹殺して地上に人類至上の生命文明を打ち建てることができるか。そうした欧米式の対決姿勢で、地上に生存する動植物やウイルスなどの微生物との壮大な生態系を利己的に搾取し続けられるか。

そうではなくて、たとえば地上の自然万物の生きた霊性を目に見えぬカミ（神霊）とも感得する日本人古来の感性と、その感性を「山川草木悉皆成仏」と表現した日本仏教の智慧とを活かして、たとえ新型ウイルスの感染もワクチンで無害化しながらも謙虚に、文字通り万物共生みの生命文明構築をめざすべきではないでしょうか。

今回の賛助会員神社社叢紹介は、大神神社を取り上げる。2010年11月に関西定例研究会として三輪山に登拝、その後、2017年には年次総会会場として大禮記念館をお借りするなど、種々協力頂いている。総会では見学会に先立ち、会員からの希望が多かった三輪山登拝も実現した。この時のシンポジウムで井原縁奈良県立大学准教授（当時・現教授）が「三輪という原風景を考える」をテーマに発表した。今回はこの時の発言を抜粋して掲載する。なおシンポジウムの全記録は『社叢学研究16号』（2018年3月発行）に掲載している。

賛助会員神社の社叢

大神神社

おおみわじんじや



緑に覆われた参道が拝殿に導く

大神神社

奈良盆地の東に位置する三輪山を神体山とし、その西麓に鎮座。拝殿から神体山を拝する古代信仰の形を今に伝える我が国最古の一つ。創祀に関わる伝承が『古事記』『日本書紀』記されており、大物主大神が三輪山に祀られることを望んだとある。三輪山はひときわ形の整った円錐形の山で、標高467m、周囲16km、面積350ha。山中には磐座が点在し、神社の古い縁起書には頂上の磐座に大物主大神、中腹の磐座には大己貴神、麓の磐座には少彦名神が鎮まると記されている。

所在地：桜井市三輪1422

祭神：大物主大神

日本造園学会が、未来に受け継ぎたい人と自然の生み出す景観・空間を、「ランドスケープ遺産」と称し、各地域を代表するランドスケープ遺産をデータベースに登録しているが、奈良を代表するランドスケープ遺産のひとつとして登録したのが大和平野越しに三輪山を望む風景で、大神神社と三輪山を代表する風景になっている。山麓に広がる大和平野越しに遥拝する風景こそが三輪山だが、その本質の一端を、「水」に注目して述べていく。

あらためて奈良盆地と水を語るうえで知っておくべき特性は、そもそも奈良盆地は奈良の北部に広がる盆地形で、標高はさほど高くない500~1,000m前後の山々に囲まれた平坦な盆地だということだ。地殻

変動で今のような盆地が作られる前、ここはもともとは湖で、山から流れ込む大小さまざまな河川が湖底に土砂を堆積し、それが地表として現れ、盆地化する。すなわち成り立ちからして、この盆地に流れ込む河川と奈良盆地は非常に関係が深い、一体としての存在といえる。

ただ一方で、奈良盆地は決して水に恵まれた環境ではない。日本の年間平均降水量を大きく下回り、奈良盆地が広がる北部は典型的な温暖少雨の気候条件だ。さらにもうひとつ、河川の流量が少ない、ないしはとどまる保水力がそもそも少ない地形条件だということがある。盆地を囲む山々から流れ出る大小様々な河川は、平野の中央部に集まって、最終的には大和川となって大阪湾に流れ込んでいく。しかしいずれも山は深くない。安定した保水力を保つためには、かなりのスケールの流域面積が必要なのだが、そもそもそれが満たされていない。

したがって、安定した用水確保が難しいという前提条件があるがゆえに、その勾配を緩やかにするために古代よりさまざまな河川改修がおこなわれてきた。その結果、今度は土砂の堆積が進み、洪水の被害が増加するという別の課題が生まれることにもなったのだが、このような自然条件と常に向き合ってきた暮らしの水を得てきたという、奈良の長い歴史がある。また、井堰、ため池など随所で保水力を高める工夫もしてきた。

もうひとつは、奈良盆地の一番の水源になっている大和川は、奈良盆地に非常に文化の勢いがあつた時代の発展を常に支えた主要の動脈であり、そのような発展を支えるために、また、付け替えや改修を行ってきた、という経緯もある。

さてこのような大和盆地ならではの水との関わりを、三輪山一体は、如実に反映している。大和盆地の東に繋がる春日断層の最南部分に位置するのが三輪山で、この断層がちょうど区切れる南端の部分に位置する秀麗な山だ。標高は約467mで、そんなに高い山ではないが、大和盆地の中でもその形容の美しさは際立っている。春日断層がちょうど切れる部分を起点に東につながっていく山々とも一線を画し、この山の美しさは、大和盆地を取り囲む山々の中でも独立している。非常に美しい形容で、印象深く、独立して目立つ存在だ。

三輪山を起点に、あるいは東に連なる山々から三輪山を介して、さまざまな水脈が大和盆地に流れ込んでおり、保水力はさほどないが、最終的に盆地を潤し大和川に流れ込むという典型的なパターンをここにみることができる。そして主な流れが纏向川と大和川が軸となっているが、その間にもさまざまな流れが注ぎこんでいる。たとえば三輪山の境内、さらにそこから山の辺の道を歩くと、さまざまな大小の流れを目にすることができののだが、昨今、しばしば渇水状態になることが気になる。また参道付近にはため池がいくつも見られ、ため池と、そこから縦

横無尽に走る水路が田園を潤し、最終的に大和川に注ぎ込んでいる。

さらに、中央部から北部に広がっているエリアの扇状地は「水垣郷」と称され、このあたりから各所で三輪山を遥拝する形態から、三輪山の信仰が始まったとも考えられている。

その中心に坐ます三輪山だが、万葉集に「味酒(うまさけ)三輪の山」と「味酒」が枕詞に歌われるように、古来、酒の神としても名高く、祭神、蛇もまた水と一体として語られる対象でもある。さらに境内を巡っていくと摂社の中でひととき美しい水を兼ね備えた池を備えた狭井(さい)神社がある。狭井というのは聖なる水の源泉、井戸、泉という意味で、この神社の井戸から湧き出す湧水が、薬水、聖水として非常に篤い信仰を集めている。

土地利用を配置した図を見てみると、時に水量の多い纏向川を中心に、北部、それから中心の部分は、三輪山並びにその周辺から注ぎ込む大中小の、最終的に大和川に注ぎ込む水脈を引いて、縦横無尽に巡らされる水路を介して、水が田畑を、特に水田を潤し、稲穂に命を吹き込み、瑞々しい風景を保っているということがわかる。

一方、特に南部に広がる町、例えばこの代表である三輪地区は中世以降、そこにつくられた道を軸に発展をとげていき、今も都市化に伴う変容がみられる。東、日の出づるところに、聖なるきれいな円錐形の山があり、そしてそこからさまざまな水が流れ込み、潤いが行きわたるような水利の工夫とともに麓を流れて、大和川に至る。そこには潤った水ベースに稲作文化が栄え、水田が広がる。田んぼのターンは変われど、このような土地利用の基本形態は、大和盆地の稲作文化の原風景を今に留めている貴重な風景ではないだろうか。

そしてなによりも大事な点は、単に水が山から注ぎ込んで美しく循環しているということではなく、このような風景に命を与え続けている根源には信仰があるということだ。東に坐ます非常に美しい円錐形の山、そしてそこから流れ出る水。その水によって潤される田園。そしてさらにそれを底支える信仰。それが循環する形となって、一体のまとまりを呈している。このような大和盆地の稲作文化の原風景と言ってしっくりくるような風景というのは、他にあまり見当たらないのではないかと考えられる。

「豊葦原之水穂国」である日本の原風景がここにある。この一帯は、開発圧力が進み始める1960年代以降、風致地区や古都保存法など、土地利用に関しては一定の制限がかけられ、その意味においては「保全」がなされてきた。しかし、この風景を生きたものにしていく一番のベースにある水の循環という点については、全国的に、特に奈良盆地において60年代以降、色々な課題が浮上している。「水」はこの風景の本質、そしてここを生きたものとしている非常に重要な存在であるにも関わらず、保全、維持継承という点からみると課題を抱えている。

春日断層をずっと上がっていくと、奈良市にも非常に美しい円錐形の御蓋山がある。若草山と背後に春日奥山を従えた御蓋山の高さはだいたい290m、三輪山の半分ぐらいで、御蓋山も東に坐ます非常に美しい円錐形の山で、大小の流れが東に連なる山々か

ら大和盆地へと流れ込んでいる。しかし、一帯の風景は大きく異なる。

この一帯は、平城京が作られたときの外京に該当し、さらにそれ以降は社寺の町として発展していく奈良のまちの中で、基本、建物が配され、特にその中心であり続けてきた、大きな社寺の境内地があった場所で、山麓に接するところに東大寺、興福寺、春日大社が配されている。明治になって奈良公園として整備され、緑地帯となり、ここをバッファーに、そのさらに西部分には建物が広がり、都市化が進んでいる。

現在の御蓋山は、一見すると後ろの山々に溶け込んでしまっていて、よく目を凝らさないとわからない。前面にはため池として水利の利用のために整備された荒池があり、その前に広がっているのは奈良公園で、さらに西に下ると、完全に町の風景が広がっている。先ほどの三輪山と大和平野の風景のように、その周り一帯と共に、全体としてひとつのまとまりのある特別な風景、何か懐かしさを覚えるような、本質的なものとして捉えられているかということ、そこまでの強みはないのではないだろうか。

東に座す非常に秀麗なしっかりとしたきれいな形の聖なる山、そして麓に盆地に向かって広がる田園とそれを貫き巡回する水脈、そしてそれを底支える信仰。この四つの要素が融合して一体となって、まとまりをもって存在している風景というのが、三輪山一帯の風景の大きな特徴であり、重要な点と言える。

もうひとつ、飛鳥と比べてみる。原風景として飛鳥もしばしば語られるが、稲作文化日本の原風景というより、日本の里の原風景と言ったほうがしっくりくるのではないか。この地は、三輪山一帯とも、御蓋山一帯とも、明らかに異なる地形と土地利用がみられる。丘陵地に連なっていく小高い山の地形の中に小面積の低地が存在しており、そこに宮殿や寺院が作られ、特に田に関しては、棚田状に飛鳥川を介して流域に築かれている。先に示した四要素が融合した風景とは、質的に大きく異なっている。

このように、ざっと比較して見てみても、三輪山一帯の風景の持っている強さと水という要素の重要性が見えてくるのではないだろうか。

この一帯の土地利用に関するさまざまな法規制がなされるようになったと同時に、水との関わりが全国的に、特に奈良盆地においては大きく変化をしてきた。大和川の環境汚染が顕在化するのもこの頃からで、例えば狭井神社からしばらく歩き、三輪川から流れてくる狭井川だが、かつては清らかな小川が流れ、そのほわりにはササユリが咲き誇っていたと言われる。しかしそのササユリは、この河川の変化とともに形を消し、今、非常に努力をして、かつてのササユリの風景を取り戻そうとしている。現状をみると、狭井川の水量は非常に乏しく、水辺の植生にはシュロ等々が入り込んでいて生態系は激変している状況だ。

このような現状を見たらうえて、どのように水というものを考えるか。三輪という原風景を考えると、水と人とのつながりを、物理的にも精神的にも、どう評価して蘇らせていくのか、ということが非常に重要ではないだろうか。

book book book book book book

- 『芦生原生林 今昔物語』渡辺弘之著
あっぷる出版社 定価2,200円+税
- 『京都 上賀茂神社と水のご縁 葵』
(一財)葵プロジェクト監修
淡交社 定価1,200円+税
- 『明治神宮 100年の森』
明治神宮とランドスケープ研究会著
東京都公園協会 定価1,200円+税
- 『自然と歴史を活かした震災復興 持続可能性と
レジリエンスを高める景観再生』
原慶太郎・菊地慶子・平吹喜彦編・著
東京大学出版会 定価4,800円+税

いずれも会誌『社叢学研究』の書評で取り上げるので、詳細はそちらに譲るが、いずれも社叢学会理事・学会員が執筆などで関係している。寒波とコロナの冬、このような本を抱えてのステイホームもなかなか良いものかもしれない。

事務局から

- 謹んで新春のお慶びを申し上げますとともに、会員の皆さま方のご健勝をお祈り申し上げます。まさか、今年もこのような新年になるうとは、思ってもみないことでありました。皆さま方におかれましては無事にお過ごしでしょうか。昨年、いよいよ地球温暖化が喫緊の課題として、世界の国々に認識された年だったかと思えます。特に昨年のクリスマスを前にアメリカを襲った大竜巻の被害には息を呑むばかりでした。これほど過酷な自然の脅威も、人間の技が原因の一旦であるのであれば、我々は、これまで積み重ねてきた知識や知恵を総動員してこの状況を改めねばならないと存じます。緑豊かな地球の第一歩は身近な自然である社叢の保全ではないでしょうか。微力ながら今後とも力を尽くしてまいります。今年も変わらず、種種ご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

- 変異株が欧米で猛威を奮っておりますが、年次総会は、予定通り開催の予定です。ワクチン接種を参加の条件にするなどは、今のところ考えておりませんが、感染の状況によっては種々お願いすることがあるかと存じます。そうならないことを祈るばかりですが、今後とも予防専一にお過ごしいただき、6月にお元気なお顔をお見せ下さい。
- 関東定例研究会は、準備の都合上、3月に開催いたします。テーマ等、決まり次第社叢学会HPに掲載いたします。なお、中部定例研究会は予定通り、3月13日に開催いたします。
- 11月に始まりました神社新報の連載は、順調に回を重ねております。いずれも読みごたえのある記事が続きます。掲載から1ヶ月間は、冒頭部分を神社新報社HPの「記事」欄で読むことができます。ご興味があれば覗いてみて下さい。

編集後記

オミクロン？ ギリシア文字に親しむことが多くなったなあ。でも！ アルファの次がベータ、で次がデルタって、ガンマはどうしたん？ そしてオミクロンって、一気に15番目まで進むのん？ 本質とはま〜〜〜まったく関係のない瑣末事が気になる。。。それにしても、いろんな手を出してくるなあ、コロナさん。ワクチンも普及し、治療薬も少しづつ認可され、治療法など様々なことがわかってきたところで新手をだすとは！

で、目下の最大の心配は3月に大相撲が大阪で開催されるのかという大問題！ 名古屋でやり、福岡でやり、大阪はダメ！ とかになった日にゃあ！！ 暴れたる！！ で、その次は2023年のラグビーワールドカップフランス大会ですよ。密かに(ん?)現地観戦を目論んでいる身としては、何としても今年中にコロナさんにおとなしくなってもらわねばなりません。フランス人の皆さん！ 大人しくマスクを付けて、浮かれ歩くのはやめて下され！

てかさ、それよりも何よりも、社叢学会年次総会の心配はないわけ？ それが何よりの心配事じゃあないのん？ あ、いや、はい、そうです。一日も早い終息を、、、って、白々しいわ！ (藤岡 郁)

東日本大震災社叢復興支援事業報告書を発行 現地調査員の生の声も 頒価 3,000円

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL・FAX 075-212-2973
URL <http://www.shasou.org> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp
facebook <https://www.facebook.com/shasou>
社叢学会関東支部 〒368-0041 秩父市番場町1-1 秩父神社社務所内
TEL080-1514-5032 E-Mail shasougakkai@hotmail.com